

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	松原 史
論文題目	ぬい 刺繍の近代—輸出刺繍の日欧交流史的研究—		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本学位申請論文は、日本、特に京都から欧州に輸出された近代の刺繍作品について、日欧の交流実態を多角的な視点から解明したものである。</p> <p>「はじめに」では、日本国内に残存する近代刺繍作品の少なさから遅れていた研究を、海外に移入された数多くの刺繍作品を取り上げることで前進させようとする本論文の立場が提示される。</p> <p>これを受け、「第一章 刺繍史の中の近代」では、刺繍史における近代刺繍（明治から昭和初年まで）の特徴が概観される。すなわち、近代以前は仏教・祭礼関係や服飾装飾に限定されたのに対し、近代刺繍は写実的畫面構成により観賞用・輸出用として製作された。輸出の萌芽は幕末に遡り、明治期には殖産興業政策で重要産業品と位置付けられて万国博覧会や内国勸業博覧会に出品され、西洋でもインドや中国の製品に続き日本の刺繍が受容された。国内に残された刺繍二〇〇点余（ちなみに申請者は展覧会・画像資料のみのもも含め二十施設約二四〇点を調査）は、博覧会出品、皇室旧蔵、貴族や実業家旧蔵、製作元に伝来、海外からの里帰り作品に分類される。</p> <p>「第二章 輸出刺繍の諸相」では、輸出向け刺繍が、大名の庇護を離れ困窮した職人によって明治初期に始まり、一時は生糸や茶・絹織物と並ぶ主要産業へと成長したが、明治四十四年をピークとして緩やかに衰退していったことが、京都の貿易統計等により跡付けられる。明治十年代以降には写実的な意匠、西洋人の嗜好に合わせた色彩や形状により製作され、二十年代には観賞用の美術品として価値が高まり、刺繍の技法も年を追って進歩していった。販路としては、問屋からの輸出や来日外国人による購入よりも、商館・外国人商人による買い付けが多く、相手国は明治三十五年の統計ではイギリス・アメリカ・フランスが八割を占める。同様に、生産地として京都産が九割を占め、高級品は現在の価格で数百万～三千万円もする美術品として販売された。</p> <p>歴史的推移を俯瞰した前二章を受け、「第三章 近代刺繍の担い手」では、国内の刺繍製作の実態が詳細に記述される。職人による分業の統括者たる田中利七・西村総左衛門・飯田新七（高島屋）は、いわばプロデューサーとして、西洋的要素・嗜好を活かした構図、西洋の用途に適した形態への修正を、絵師の協力の下、刺繍職人に指示していった。すなわち、彼らは岸竹堂・今尾景年・竹内栖鳳ら京都画壇の有力者に写実的な下絵を描かせ刺繍の芸術性を高める一方で、超絶技巧を駆使する刺繍の名手をはじめ、木工職人・漆職人・金工職人など様々な専門家を束ねたのである。一方、これらとは異なる刺繍の担い手を養成した教育機関としては、京都の女紅場・女学校、東京の共立女子職業学校や女子美術学校、京都の盲啞院、滋賀の彦根貿易刺繍伝習所などがあった。</p> <p>「第四章 欧州に残る日本刺繍コレクション」では、海外の刺繍作品が精査される。イギリス・フランス・スペイン・ドイツ・スイス・オーストリア・ポーランド・ハンガリー・チェコの十八施設に蔵される二五〇点余の刺繍作品が、屏風や額装、軸、壁掛、着物ガウンなど形状ごとに分類され、収蔵の経緯が詳細に跡付けられる（ちなみに申請者は展覧会・画像資料のみのもも含め二十五施設約三〇〇点を調査）。収蔵目的では、応用美術品、東洋美術、テキスタイルコレクションの三パターンに、またコレクションの形成経緯では、日本人商人または外国人商人による輸出、来日外国人による土産物のほか、皇室・外交関係の贈答品、万国博覧会での売買品に類別される。さらに、欧州に渡った刺繍作品が現在に至るまで美術市場で売買される第二次流通の実態や、王室・貴</p>			

族に蔵されるに至った経緯が、実際の刺繍作品に即して明らかにされる。

「第五章 描かれた刺繍」では、刺繍作品の現物は残されていないものの、イギリスのホイッスラー、フランスのマネやポンサン、スペインのマスリエラ、オランダのアンナ・アルマ・タデマやブレイトネル、チェコのヒナイスらの絵画に描き込まれた刺繍作品が詳細に分析される。これによって、従来知られていたジャポニズムの画家ホイッスラーやマネ以外にも刺繍は広く欧州の画家に愛され、流行の先駆となったことが解明される。

「第六章 刺繍作品に見る日欧交流」では、膨大な「高島屋写真帖」の図案を分析することで、刺繍における西洋モチーフの輸入（獅子図等）、西洋で好まれた日本的モチーフの強調（花鳥画的図案等）や変換（西洋の画題に日本の風物を当てはめること）、仏画や円山応挙等の古画からの摂取が示される。一方、欧州出版物の挿画と対照させることで、西洋で好まれた図案が獅子図や、日光東照宮等の日本的風物であることが示され、日本の商人たちが西洋の嗜好に敏感に対処した可能性が提示される。西洋への輸出を意識して、屏風は椅子生活に合わせた表装となり、表具も長距離の移動を前提にしたものとなった。逆に西洋でも、壁掛や着物ガウンなどの刺繍に日本的モチーフ・色使いが模倣されており、相互交流の細部が明らかにされる。

「別冊資料論」は、「1、刺繍作品一覧」「2、調査結果報告Ⅰ 国内」「3、調査結果報告Ⅱ 海外」「4、近代刺繍家列伝」「5、刺繍関連年表」から成る。特に1は調査した全刺繍作品の基礎データをカラー図版とともに集成的なものであり、2・3の調査報告データ、および文字通りの基礎的資料である4・5と相俟って本論文の拠り所をなす。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文の優れた着眼点は、「はじめに」で問題提起されたように、国内はもとより、海外に残存する近代日本の刺繍作品を幅広く調査したことにある。その範囲は国内およそ二十施設約二四〇点、海外二十五施設約三〇〇点に及ぶ。すなわち、申請者は科学研究費補助金DC1を取得して以来、日本および欧州・アメリカのほかトルコ・インド・台湾など世界各国の美術館を精力的に調査し、一つ一つ現物に当たって刺繍作品の基礎データの収集に努めてきた。従来刺繍史研究が近世以前に限定されがちであったのに対し、近代刺繍、さらには国内のみならず海外にも注目した点に、まずもって本論文最大の価値が存する。

以下、各章ごとにその成果を略述しよう。

「第一章 刺繍史の中の近代」では、明治期の刺繍作品が殖産興業政策下の重要産業品として商館・外国人商人に買い付けられ、写実的で観賞に堪える高額な美術品へと発展を遂げてイギリス・アメリカ・フランス等に積極的に輸出された事実を具体的に明らかにしている。これは、超絶技巧を駆使した我が国近代刺繍の全貌に迫る上で極めて重要な出発点となっている。「別冊資料論」「1、刺繍作品一覧」はその具体的なリストであり、今後の研究への寄与は計り知れない。

「第二章 輸出刺繍の諸相」では、各種の統計・資料に基づいて、刺繍が、一時は生糸や茶・絹織物と肩を並べる主要産業へと成長していったこと、その九割は京都で生産されたこと、刺繍技法の向上により現在の価格で数百万～三千万円もの高額な美術品として売買されたことを明らかにした。明治期の輸出に占める刺繍産業の重要性、刺繍産業に占める京都の重要性を実証した優れた成果といえよう。

「第三章 近代刺繍の担い手」では、田中利七・西村総左衛門・飯田新七（高島屋）ら京都の有力商人が、いわばプロデューサーとして絵師・刺繍職人・木工職人・金工職人等を率い、西洋の嗜好に合わせた写実的な刺繍作品を製作していった実態が具体的に記述される。これは、輸出品としての刺繍製作の実際を初めて明らかにした意義深い成果であり、「第六章 刺繍作品に見る日欧交流」で、田中らが買い手の西洋人の嗜好を調査し、西洋的モチーフや西洋人の好む日本的モチーフを刺繍に取り込んだ可能性を細部に涉って指摘した点と表裏をなす。なお、第三章では、上記の有力商人とは別に、京都や東京、さらには滋賀の彦根で、女工や女学生、啞者、農閑期の子女への職能教育として、刺繍技術の教授が行われていたことを跡付けており、厚みのある論述となっている。

「第四章 欧州に残る日本刺繍コレクション」は、イギリス等九カ国十八施設に蔵される二五〇点余の刺繍作品を網羅的に調査した上で、形状ごとに分類し、収蔵の経緯・目的を記述するほか、現在に至る第二次流通の実態を個々の作品に即して調査するなど、本論文中最も労力を要したものとなっている。優れた美術品として、また日常生活を彩るインテリアとして、各国に残されてきた刺繍作品を再発掘した功績は極めて大きいと言わねばならない。

加えて、「第五章 描かれた刺繍」では、西洋絵画の背景等に描き込まれた刺繍作品に注目することで、当時の画家の手元に現在知られているよりも遥かに多くの刺繍作品が存在していたことを明らかにした。絵画に描かれた刺繍を研究対象とした着眼点は秀抜であり、西洋に渡った刺繍作品の全貌を窺う上で有効な手段といえよう。これによって、従来知られていたジャポニスムの画家以外でも、刺繍作品が広く行き渡っていたことが判明した。

末尾の「第六章 刺繍作品に見る日欧交流」では、前述の西洋的モチーフを調査する過程で、西洋人好みの獅子図の起源をヴァスリフ・ゲーザ（ハンガリーの画家で十

九世紀にイギリスで活躍)の原画と特定し、日本への流通過程を解明した点が特筆される。また、西洋の生活様式に合わせた表装、長距離移動を前提とした表具など日本側による調整の一方で、西洋の側でも、日本的モチーフや色使いを模倣して刺繍が製作されたことが明らかにされた。本論文のテーマに相応しく、日欧相互の交流ぶりが印象的である。

以上のように、本論文は近代の刺繍という未開拓の領域に果敢に挑み、その中心が輸出向けであったことを明らかにした労作であり、従来の日欧交流史研究を前進させた力作と評価できる。近代刺繍の主要産地として京都の重要性に着目したことは、京都大学で学んだ申請者ならではの観点といえよう。とはいえ、京都以外ではどのような刺繍が製作され、どのように輸出されたのかなど、新たな疑問も生じてくる。一方、今後の海外調査によって、どこにどのような刺繍作品が埋もれているのか、その発掘も期待される。こうした点については今後の研究に委ねざるを得ないが、近代刺繍における日欧交流史を国際的・学際横断的に解明し、中心となる骨組みを完成させた本論文の功績は疑いようもない。

よって、本論文は博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成30年6月15日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： _____ 年 _____ 月 _____ 日以降